

小学校教員養成のための模擬授業の効果に関する一考察

— 自己評価・観察者による評価を取り入れて —

One consideration about the effect of the trial lesson
for primary teacher training

— Undertaking self-evaluation and participants evaluation —

林 渉*

Wataru HAYASHI

キーワード：「模擬授業」「自己評価」「観察者による評価」

Key word：“trial lesson” “self-evaluation” “participants evaluation”

要約

模擬授業に自己評価・観察者による評価を取り入れることによって、模擬授業の改良事項を受講生自身に気付かせることができた。受講生たちに2つの特徴があった。

- (1) 評価の観点事項を示した評価シートを用い、模擬授業に対する自己評価・観察者による評価を取り入れたとき、受講生全員は「良い点」「改良点」の指摘ができ、示した観点事項以外の気づきができた。
- (2) 模擬授業における教師役の「良い点」に関する自覚の程度は児童役より低かった。また、教師役の自覚の程度が高かった項目は【授業の完成度】の改良点であった。【指導の技能】については、教師役・児童役共に自覚の程度の差が少なかった。

以上の取り組みによって、講義の評価（「教育実習で役立つ」「授業に対する自信」など）に上げることができた。

Abstract

The participating students themselves were able to be made to notice the matter of improvement of a lesson by undertaking self-evaluation and participants evaluation for a trial lesson. The participating students had two features.

- (1) When the self-evaluation and participants evaluation for a trial lesson were undertaken using the assessment sheet in which the matter of evaluation viewpoint was indicated, all participating students were associated with being able to perform “a good

* 東海学園大学教育学部教育学科

point” and “an improving point”, and noticing other than the indicated viewpoint under consideration.

(2) The grade of the consciousness about “the good point” of the role of a teacher in a trial lesson was lower than that of the role of a pupil. Moreover, the item which was high was an improving point of [the completeness of a lesson]. About [skill of instruction], there was little difference of the grade of awareness of both the role of a teacher and the role of a pupil.

By the above measure, it was possible to tie to evaluations (“it is useful by practice teaching” “confidence over a lesson”, etc.) of the lecture.

1. はじめに

中央教育審議会の答申ⁱ⁾では「教職実践演習」の新設・必修化が提案され、模擬授業を取り入れた教職授業カリキュラムの試行を多くの大学で実践してきている。伊佐ⁱⁱ⁾は、学生が自立して授業の組み立てを行えるよう模擬授業を中心にしている。養成段階では苦手意識を克服すべきであり、教壇に立って自信を持って教えられるなどを考えながら効果的な模擬授業の検討を行っている。秋吉らⁱⁱⁱ⁾は、学生が理科を実践していくための力量が模擬授業でいかに形成されるか、そのための評価方法をさらに検討していく必要があると提案している。

本学の学生を含めて文系の多くの学生は、理系知識の未熟さを自覚しながら理科の授業を行うこと自体に不安を抱いている。本学では、「理科研究」講義の中で、7分程度の学生による『授業の導入部分に重点を置いた模擬授業』に取り組んできた。受講者同士、模擬授業を見せ合うことによって、子どもたちの興味・関心を高めていくための方法を考えさせたり、表現方法の難しさを体感させたりすることができた。また、受講者自身の授業に取り組む姿勢について、自らを振り返る学生も多くなってきた。しかし、授業に取り組む経験の浅い受講者にとって、受講者自ら「この様に修正していけばいい」という見通しを持てる受講生は多くない。

そこで、模擬授業後の受講者による「自己評価」「観察者による評価」を一連の評価する場としてとらえ、受講生自身に授業の改良すべき箇所を気付かせるための模擬授業の実践に取り組むこととした。本論は、その実践と課題の報告である。

2. 研究の内容

(1) 研究の目的

本研究は、小学校教員養成としての望ましい資質の向上を図るため、教員養成課程科目「理科教育法」の講義の中で、学生自身が取り組む「模擬授業」の効果について、有効的な手法を探るためのものとする。

(2) 方法

ア 学習指導案の作成

「理科教育法」講義の中で、各自の希望する授業単元ごとに受講者（28名）を11班に分け、受講者全員に学習指導案の作成を行わせる。班内一人の教師役を決め、どのような単元を行うのかの話し合いから始めさせる。模擬授業の学習内容を調べる活動、予備実験、模擬授業の練習などに取り組みせ、授業の準備段階の経験をつませることをねらいとして取り組ませる。最終的に、受講生同士が知識を補ったりアイデアを出させたりして、一人一人指導案を完成させる。以上の実践を基に、教師役・児童役の行動観察・事後アンケートを行い、教師役による模擬授業に取り組む経過の中で改良に取り組む行動を明らかにする。また、その教師役を含めて受講者全体でどのような改良事項に気付いていくか、評価シートの記述から調査する。

イ 模擬授業の実施

教師役が作成した学習指導案に基づいて模擬授業を実施する。一般的研究授業を実施した場合とほぼ同様な方法で、教師役・児童役（受講者）を交えた検討を行う。詳細は、後述する。

(3) 研究調査対象及び実践・調査の実施計画

本学生（発達教育学科・幼小コース・約28名）を調査対象とする。

(4) 模擬授業の実践経過及び考察

ア 模擬授業の実施前の経過、及び考察

「理科教育法」第1回目の講義で、模擬授業についてのガイダンスを実施した。模擬授業テーマを10種提示し、取り組んでみたい授業テーマを選ばせた。選んだ授業テーマごと受講生を集め、実践していく取り組み方を話し合わせた。模擬授業で全員に教師役を経験させたいが、講義回数には限りがあるため、2～3名の班で取り組ませた。一つの模擬授業の時間の設定は25分間の授業として、タイムキーパーを置き、時間が来たら強制終了とすることとした。教師役を中心にそれぞれ役割を決めさせた。また、自分の班以外の模擬授業の時は、他の班のメンバーは児童役として授業に参加し、模擬授業を全員でつくり上げていくように説明した。

以上のような取り組みによって、表1のようにAからKまでの11班に集約ができた。15回講義の内、初めから第6回目までに準備段階の時間を設定し、各講義の後半30分間ずつ使用した。班ごとの受講者同士は、模擬授業の流れを話し合ったり指導案作成の検討をしたり、必要に応じて予備実験の計画及びその実施をしたり、教材・教具の作成をさせたりした。時には班での話し合いに担当教員も加わり、授業の流れが適当かどうか、予備実験・予備調査が必要かどうか、必要な器具が用意できるか、などの検討を実施した。模擬授業を実施する班ごと、教材・教具の準備・予備実験・ワークシート・指導案の作成が進められた。予定された期日までに、準備が進められそれらの提出物が担当教員まで提出された。提出の際には教師役と担当教員との模擬授業の打ち合わせを設け、授業実施前日までに、模擬授業で使用する物品の準備を進めさせることがで

きた。その際、指導案の点検及び添削指導、教材・教具の検討、使用器具などの準備を行った。

表1 選択させた模擬授業課題一覧

模擬授業1	鏡などを使い、物に日光を当てると、物の明るさや暖かさが変わることをとらえさせることができる授業。 (3年—比較)・・・5名(K班)(B班)
模擬授業2	児童が興味・関心をもって、昆虫の種類によって食べ物と住みかに違いがあることに気付かせる授業。 (3年—比較)・・・3名(C班)
模擬授業3	乾電池と豆電球などを使い、電気を通すつなぎ方と通さないつなぎ方があることを、児童が興味・関心をもって探し出す授業。 (3年—比較)・・・4名(D班)(G班)
模擬授業4	磁石を使い、磁石に付く物や磁石のはたらきを調べ、磁石の性質を調べることができる授業。 (3年—比較)・・・2名(F班)
模擬授業5	乾電池2個を使って、豆電球を明るくしたり、モーターを強く回したりするつなぎ方と、電流の強さや向きとを関係付けながら調べる授業。 (4年—関係付け)・・・0名
模擬授業6	植物は生きているときも、枯れてからも、動物の大切な養分になっていることを、具体例をあげて児童に理解させる授業。 (4年—関係付け)・・・3名(E班)
模擬授業7	四季を通して観察してきたカエルやtentウムシなどの動物の観察記録をもとに、季節を動物の活動との関わりについて児童に気付かせ、その理由について考えさせる授業。 (4年—関係付け)・・・3名(I班)
模擬授業8	てこを使い、力の加わる位置や大きさを変えて、てこの仕組みやはたらきを調べ、てこの規則性を気付かせる授業。 (6年—推論)・・・3名(H班)
模擬授業9	植物の発芽に必要な養分は子葉に含まれていることを、実験を通して理解させる授業。 (5年—条件制御)・・・3名(J班)
模擬授業10	水中で生活している魚も呼吸していることを、具体例をあげて児童に理解させる授業。 (6年—推論)・・・2名(A班)

第3回目の講義後半、模擬授業の試しをやってみた班は、メンバーの色々な意見を受け、修正した方が良いということになった。一度、作成した指導案を修正することとなった班があった。その様子を見ていた他の班も、同様に修正する姿がみられた。第4～6回目の講義の中で、指導案の修正が進み、「学習のめあて」提示用の教材を作り直す班もみられた。予備実験をしたり図書館で調べ学習をしたりする姿、観察・実験器具の取り扱いや操作を練習する姿、教師役(授業者)自身が「これなら(何とか)できる」という見通しを得ていく様子が見られた。一方、「これでいいのだろうか」と迷う班もいて、なかなか指導案が完成しない班もあった。第6講終了時にはほぼ指導案ができ、同時にワークシートの準備もできていった。しかし、いざ模擬授業の前日というところで、観察経過の部分をどう説明しようかなど、迷いがあり、ギリギリ準備できた班が多かった。模擬授業を始める前には、教科書の内容を調べ、教材・教具の作成、予備実験、板書案など、数々の準備・用意が必要であるとの経験をさせることになった。以上の経過を経て、表2のように、模擬授業が実施された。

表2 2011年度秋学期「理科教育法」での模擬授業計画

講	日付	内容	学年・単元	教材・教具	班
7	11/9	模擬授業2	3年・昆虫を育てよう	モンシロチョウ継続観察記録	C班
8	11/16	模擬授業10	6年・体のつくりとはたらき	魚やクジラの呼吸	A班
	11/16	模擬授業1	3年・光のはたらきを調べよう	太陽の光で水を温めてみよう	K班
9	11/30	模擬授業3	3年・豆電球に明かりをつけよう	電気を通すものと通さないもの	B班
	11/30	模擬授業1	3年・光のはたらきをしらべよう	光の明るさと暖かさ	D班
10	12/7	模擬授業3	3年・豆電球にあかりをつけよう	電気の通り道	G班
	12/7	模擬授業6	4年・季節と生き物(冬)	季節の小動物・枯葉など	E班
11	12/14	模擬授業4	3年・磁石のふしぎを調べよう	磁石に付くもの付かないもの	F班
	12/14	模擬授業9	5年・植物の発芽	発芽と養分	J班
12	12/21	模擬授業8	6年・てこのはたらき	てこのつり合い	H班
	12/21	模擬授業7	4年・季節と生き物(冬)	季節の動物(夏と比べて)	I班

イ 模擬授業後の授業検討会・授業記録視聴の取り組みについて

第7回目の講義後半から、一つ目の模擬授業が開始できた。模擬授業が終了した時、教師役に対して授業に対する質問・応答の時間を設けた。児童役だった受講者から2～3ずつの感想・質問がされた。教師役への遠慮からか、「導入の面白さ」「学習内容の興味深さ」などに対する質問・意見が多かった。教師役は、その授業に取り組んだ理由を答えることに終始していた。また、教師役が答える中で、改良した方が良いと思うが、どう答えていったらよいか、の考えが浮かばなかったりまとまらなかったりすることが多かった。担当教員としては明らかな誤りや修正した方が良いと思われる点を、その場ですぐ指摘し訂正させたいとも考えたが、教師役自身の気付きや受講者同士の話し合いに任せることに重点を置いた。

また、模擬授業の様子は録画し、班ごとDVDを作成・配布し、家庭で視聴させることとした。後日、画像を見た教師役は「(自分の)言葉遣いを含めて、自信をなくした。」とか「緊張して、何を言ったか覚えていなかった。」などと申し出てくることもあった。さらに、「模擬授業の反省をしたいので、他の人の評価(の記述)を見せてください。」と申し出る教師役もいた。

ウ 評価シートについて

今回使用した評価シート(図1)の観点事項は、観点事項1「声の大きさ」、観点事項2「顔、手の表情」、観点事項3「導入の工夫」、観点事項4「学習内容の分かりやすさ」、観点事項5「授業の完成度」の5つとした。以上の観点事項を示した評価シートを使って、教師役自身による自己評価・観察者(児童役)による評価を実施した。評価方法は「大変良い=4」「良い=3」「悪い=2」「大変悪い=1」の評定尺度法(4件法)とした。また、「良い点」「改良点」「批評」については、自由記述法を活用した。

図1 使用した「観点事項を示した評価シート」の例

観 点 事 項	大変良い	良い	悪い	大変悪い
声の大きさ	4	3	2	1
顔、手などの表情	4	3	2	1
導入の工夫	4	3	2	1
学習内容の分かりやすさ	4	3	2	1
授業の完成度	4	3	2	1
良い点			改良点	
批評				

エ 自己評価・観察者による評価の経過と結果、及び考察

一つの模擬授業が終わるごとに、教師役による授業の反省・児童役からの質疑・相互の話し合いの後、自己評価と観察者による評価の場面を設定した。模擬授業が進むにつれて、教師役に取り組んだ受講者は授業の配慮すべきことの気付きが少しずつ増えていった。これは改良点の指摘を基に、改良のヒントを教師役自身が気付き、より良い授業にするためにはどうしたら良いのだろうかという視点を得たからに他ならない。教材・教具の準備、話し方の練習など、分かり易く表現するためにはどうしたら良いかと修正を加える教師役が増えていった。表3は、観点事項の平均値及び標準偏差値である。

表3 模擬授業に対する「自己評価」「観察者による評価」の結果比較

観 点 事 項	自己評価平均値 (標準偏差値) n=11		観察者による評価平均値 (標準偏差値) n=267	
声の大きさ	3.55	(0.522)	3.73	(0.451)
顔、手などの表情	2.73	(0.905)	3.36	(0.598)*
導入の工夫	2.27	(0.905)	2.97	(0.722)**
学習内容の分かりやすさ	2.36	(0.505)	3.12	(0.719)**
授業の完成度	2.09	(0.539)	3.07	(0.654)**

*は $p < 0.05$ **は $p < 0.01$

自己評価と観察者による評価の間で平均値に差が生じた事項は、「顔・手などの表情 ($t = 2.54$, $df = 276$, $p < 0.05$)」「導入の工夫 ($t = 3.00$, $df = 276$, $p < 0.01$)」「学習内容の分かりやすさ ($t = 3.85$, $df = 276$, $p < 0.01$)」「授業の完成度 ($t = 5.03$, $df = 276$, $p < 0.01$)」であった(表3)。

模擬授業後の教師役の自己評価では、表3の結果より「声の大きさ」「顔・手などの表情」は、「大変良い」「良い」と評価している。また、「導入の工夫」「学習内容の分かりやすさ」「授業の完成度」については、「大変悪い」「悪い」方だと判断し、何らかの不足や不備を感じたものと考えられる。特に「授業の完成度」の自己評価(平均値2.09)は、観察者による評価(平均値

3.07) より約1近くも低く、教師役自身「(自らの) 授業は不十分(未完成)だ」と厳しく判断している。しかし、それに比べて授業を受けた児童役の評価は、観察者による評価全体の平均値3.25で「授業は大変良い」「良い」と判断し、教師役に比べると甘く評価する児童役が多かった。

教師役自身が模擬授業を自己評価することによって、自分の考えを色々な角度から見直し、考えを深めたり修正したりすることができるようになったものとする。また、授業者であった者が観察者という立場で、自分以外の模擬授業を観察者による評価することによって、評価の視点の広がる機会ができ、自分にはない良さを見つけることができたものとする。そのことが、自己評価(教師役)の平均値より観察者による評価平均値が大きくなった一因であると考えられる。

オ 記述内容のカテゴリ分類の経過と結果、及び考察

「自己評価」「観察者による評価」を実施した後に、教師役には授業に取り組んで「良かった点」「改良が必要な点」、児童役(他の受講者)には授業の「良い点」「改良点」の自由記述をさせた。杉山ら^{iv)}の研究を参考に、授業観察視点の「内容」を明らかにするために、記述内容についてKJ法的手法によって分類を行い、【教師の振る舞い】【授業の構成】【教材・教具】【指導の技能】【授業の完成度】など、5つのカテゴリを設定し、これに基づき記述内容を分類(表4)した。

また、(自己評価指摘数)/(観察者による評価指摘数)×100から求められる割合について算出し、指摘を受ける教師役自身の自覚の程度(度合い)を比較した。

表4より、児童役からの指摘「良い点」は、模擬授業1つ当たり平均72.0箇所の指摘、一人当たり2.97箇所の指摘である。それに対して、教師役11名からの指摘箇所は一人当たり1.36箇所であり比較すると、児童役で参加した受講者からの指摘「良い点」の方がより多く指摘できたことになる。

表4 記述内容のカテゴリ分類

観点事項	自己・良い点	相互・良い点	「良い点」の自己評価/観察者による評価	自己・改良点	相互・改良点	「改良点」の自己評価/観察者による評価	項目
〈示した観点事項〉							教師の振る舞い
声の大きさ・口調	4	140			15		
顔・手の表情		31		1	8		
〈示した観点事項以外〉							
言葉づかい		2	7/365×100		19	7/118×100	
児童との共感・話し方		45	=1.92%	1	8	=5.93%	
発言に対する対応の仕方		82		1	37		
児童の行動に対する対応	2	18		1	14		
机間指導・支援	1	38		1	7		
態度・落ち着き		9		2	10	差 4.01	

〈示した観点事項〉 導入	1	23		3	33		授業の構成
〈示した観点事項以外〉 分かりやすい構成		16		2	23		
授業の流れ		11	$3/95 \times 100$	1	9	$12/135 \times 100$	
進み具合	2	11	$=3.16\%$		12	$=8.89\%$	
児童の活動				1	2		
子ども中心		19		2	13		
時間配分		3		3	35		
気づきのある授業		12			8	差 5.73	
〈示した観点事項以外〉 教材・教具	3	82		4	41		
ワークシート		28	$3/168 \times 100$		21	$6/106 \times 100$	
写真、図など		8	$=1.79\%$	2	7	$=5.66\%$	
資料など		3			8		
実物など		16			2		
予備実験・準備		31			27	差 3.87	
〈示した観点事項〉 分かりやすさ		61			41		指導の技能
〈示した観点事項以外〉 発問		4	$1/153 \times 100$		6	$5/144 \times 100$	
予想の立て方		9	$=0.65\%$	1	14	$=3.47\%$	
実験の成功	1	23			6		
実験上の留意点の指示		18			18		
教科書の使い方		2		1	8		
板書		36		3	51	差 2.82	
〈示した観点事項〉 授業の完成度					3		授業の完成度
〈示した観点事項以外〉 学習目標の明確さ		4		3	29		
学習指導案		3	$1/11 \times 100$	1	18	$11/63 \times 100$	
指導案どおりの進行			$=0.91\%$		9	$=17.46\%$	
子どもの理解度	1	2		2	1		
学習内容に対する知識				1	1		
模擬授業に対する練習 (班の協力)		2		4	1		
					1	差 16.55	
計	15	792		41	566		

また、今回使用した評価シートの「示した観点事項のみ（5つ）」で-集計してみると、255箇所
の指摘になる。それに対して、児童役の授業参観者としての視点が増え、「示した観点事項以外」
の指摘が537箇所を上り、「示した観点事項以外」の方が多し指摘となった。観点事項の種

類が28種になったことは、模擬授業を互いに参観し授業同士を比較し評価する中で、自分にはない良さを感じ表現ができたからだと考え。

児童役からの指摘「改良点」の記述は、総計 566 箇所になった。一人当たり平均 2.12 箇所の指摘である。教師役自らの「改良点」指摘数 41 を一人あたりに換算すると平均値は 3.72 箇所となり、教師役自身の指摘「改良点」の記述の割合が多かった。教師役自身、取り組んだ授業の反省や質問などから、自身の改良の必要な点に分かり「(児童からの発言に) 対応すべきだった」「導入が長過ぎ、時間配分が分からなくなった」「(あの資料を) 準備すれば分かり易かった」「書いた板書を消してしまったことがまずかった」「指導案を検討するとき、考えが及ばなかった」「学習のめあてがはっきりしていなかった」など、徐々に改良すべき点に気付いていったものと考えられる。また、児童役「改良点」の指摘では新たに 4 つの観点事項の種類が増え、32 種・466 箇所が記述できた。このことから、児童役の方が様々な視点で授業参観できるようになったものと考えられる。

また、(自己評価指摘数) / (観察者による評価指摘数) × 100 の割合から、取り組んだ教師役の自覚の程度が判断できる。【教師の振る舞い】【授業の構成】【教材・教具】【指導の技能】【授業の完成度】全体的な傾向として、「改良点」より「良い点」の値が小さいことから、「良い点」における教師役の自覚の程度は低かった。教師役自身、自分の良い所が分かりにくかったと考えられ、児童役は気付きやすいが教師役はそれを自覚しにくい特徴がみられた。

さらに、(改良点%) - (良い点%) が + なら、「改良点」に教師役の自覚(自己意識)がはたらいっていると判断できる。【授業の完成度】の差は 16.55 と、一番大きくなった。これは、【授業の完成度】に対して教師役「改良すべき点」に自己意識がはたらき、児童役より自覚が大ききはたらいたことを示すと考える。「授業が上手にできたかどうか」「授業に不備はなかったかどうか」など、教師役の自己意識が高い状態にある特徴がみられた。【指導の技能】は一番差が小さかったことから、教師役・児童役共に、それを意識しにくい特徴がみられた。【授業の構成】の指摘数の割合は多かったものの、教師役・児童役の自覚の差は、比較的少ない特徴もみられた。

教師役に対する批評(付表)には、模擬授業が進むに連れて「自らがその授業を行った時どのように取り組むか(改良点)の案を考える。」「気付いたことを、より具体的に(改良点を)自分の授業に活かそうと考える。」などの記述が増えている。このことは、受講者の自覚の変容の表れとして読み取ることができ、その変容が教師役自身の模擬授業の改良や修正する能動的行動につながったものと考えられる。

カ 模擬授業の評価、及びその考察

講義の終了時、模擬授業に対する受講者の評価(表 5、6)を実施した。その結果、「模擬授業に熱意をもって取り組めたか」(平均値 3.51)、「模擬授業は、教育実習に役立つと思うか」(平均値 3.85)であり、受講者全員が肯定的に評価している。一方、「理科の授業に対する自信」

は、表6のように模擬授業事前の平均値2.14が事後の平均値2.51と改善されたものの、その評価値は受講者全体として「十分、自信がある」「少し、自信がある」と言える結果にはならなかった。

受講者全員が教師役に取り組みなかったものの、教師役のあり様を見て学ぶ部分が多くあり、授業への取り組みに対する目安を得たのではないかと推察される。なお、教師役だけの平均値は2.91であり、教師役として直接取り組んだ人にとっては、より「自信がある」につなげていったのではないかと考える。しかし、自分が教師役をできない、実際の児童の反応とは違うのではないかなどの不安を抱く受講者もいて、課題を残した。

表5 模擬授業に対する受講者の評価

模擬授業に対して (n=27)	十分 思う	少し 思う	あまり 思わない	全く 思わない
熱意を持って取り組めたか	14人	13人	0人	0人
班ごと協力して創って行こうと思ったか	22人	4人	0人	1人
教育実習に役立つと思ったか	23人	4人	0人	0人

評価方法は「十分思う＝4」「少し思う＝3」「あまり思わない＝2」「全く思わない＝1」の評定尺度法（4件法）とした。

表6 事前・事後における模擬授業に対する受講者の評価

理科の授業に自信がありますか	十分ある	少しある	あまりない	全くない
模擬授業前の全体評価 (n=28)	0人	10人	12人	6人
模擬授業後の全体評価 (n=27) (教師役だけの内訳 n=11)	4人 (3人)	11人 (4人)	7人 (4人)	5人 (0人)

評価方法は「十分ある＝4」「少しある＝3」「あまりない＝2」「全くない＝1」の評定尺度法（4件法）とした。

3. おわりに

模擬授業に自己評価・観察者による評価を取り入れて実践、及び考察してきたが、受講生たちに次の特徴がみられた。

- (1) 評価の観点事項を示した評価シートを用い、模擬授業に対する自己評価・観察者による評価を取り入れたとき、受講生全員は「良い点」「改良点」の指摘しやすくなり、示した観点事項以外の気づきができた。
- (2) 模擬授業における教師役の「良い点」に関する自覚の程度は、児童役より低かった。また、教師役の自覚の程度が高かった項目は【授業の完成度】の改良点であった。【指導の技能】については、教師役・児童役共に自覚の程度の差が少なかった。

以上の取り組みによって、受講生自身が授業の改良すべき箇所に気づき、「改良すべき点」の自覚が高まり、改良するための能動的行動につながったと推察できる。このように、授業者自身

の自己評価と観察者による評価を組み合わせた評価活動をすることによって、受講者の気付きを増やすことができ、講義の評価（「教育実習で役立つ」「授業に対する自信」など）を高めることにつながった。

教職科目の中で受講者の実践力の向上を図るためには、模擬授業を効果的に取り寄せ、受講者自身に授業を改良していこうとする向上心を育てることが大切である。常に、授業実践とそれを改良していく視点をもつことができるかどうか、苦手な教科（特に理科）を克服し日々の研鑽を積むことに対する意欲につなぎたい。

今後、「教育実習に役立つ」「理科授業に対する自信を高めること」に焦点を当てていきたい。

引用文献

- i) 中央教育審議会答申（2006）：「今後の教員養成・免許制度の在り方について」文部科学省
- ii) 伊佐公男（2010）：「小学校教員養成における理科の授業改善（I）」仁愛大学研究紀要 人間生活学部 篇第2号 p147～153
- iii) 秋吉博之、溝邊和成、石井恭子（2011）：「模擬授業を生かした大学での授業の取り組みと課題」日本理科教育学会第61回全国大会発表論文集、第9号 p118.
- iv) 杉山雅俊、山崎敬人（2011）：「教師志望学生の理科授業についての観察視点に関する研究——模擬授業についての批評を事例として」日本理科教育学会第61回全国大会発表論文集、第9号 p130.

付表 模擬授業に対する批評原文の抜粋

(11/9) 模擬授業1時間目（C班）

- 児童に対する言葉遣い口調が良くなかった。自分がやる時も気を付けていきたいと思った。
- 板書を使って、児童からの意見を少しずつ書いていくともっと分かりやすい。

(11/16) 模擬授業2時間目前半（A班）

- 導入部が難しいと意欲や関心がなくなりがちになるので、気を付けた方が良かった。
- やはり指導案をもう少し詳しく書くと良い。アドリブが少し気になった。少し強引で分かりにくい。
- 明るい雰囲気、分かりやすかった。導入をもっと簡単にすることで、興味が湧く授業になったと思う。

(11/16) 模擬授業2時間目後半（K班）

- 屋外へ出て活動することにより、子どもたちの興味を持たせ続けることができた。しかし、よく分からない部分もあったので、分かり易くすべきだと思った。
- 児童の発言の機会が少なすぎるという点が気になる。プリントを集める前に、一度子どもたちに確認の発言を求めるべきだったと思った。

(11/30) 模擬授業3時間目前半（B班）

- 導入の仕方が日常生活を含めていたので、関心を引き出させ易かった。次の模擬授業では参考にしたい。
- どのように、こちらに集中させることができるのかが、うまく授業に取り入れられていたと思います。自分も、声と表情を大切にしたい。

(11/30) 模擬授業3時間目後半 (D班)

- 全体的に粗雑な感じだったので、改善すれば、もっと良くなるはず。
- 児童の活動がとて多く、飽きない授業でした。私たちも次に見習いたい。
- 子どもの発見というところに、もっと重点を置いて指導案を作っていくべきだと思った。

(12/7) 模擬授業4時間目前半 (G班)

- 子どもが考え各自で調べていける授業であり、私もこうありたい。
- 小3の内容として、考え方や話し方も工夫されていて、私も見習いたい。
- 完成度が高く、よく準備ができていたので、事前準備の大切さを改めて感じました。

(12/7) 模擬授業4時間目後半 (E班)

- 最初から最後まで授業にかかる時間を、実際に計ってみるべきだ。
- まとまっている指導案だが、他の児童役の意見に引き込まれ、どんどん変わっていくのがよく分かりました。しっかりと予測していくことが大切。
- 子どもの発言に対するフォロー、予想外の意見に対しての対処がうまくいけば、良い授業になった。

(12/14) 模擬授業5時間目前半 (F班)

- 説明も丁寧で、児童に対する思いが伝わった。もっと、板書などを活用したり、教具があったりすると興味を引くことができたのでは。
- いろいろな道具や物を試すことができ、興味・関心がより掻き立てられると感じた。子どもとの共感する場面が大切であると感じた。

(12/14) 模擬授業5時間目後半 (J班)

- 少し言葉づかいが気になるところがあり、自分も言葉には注意しなければいけないと思った。
- 実験の結果が班によって違っていた時、グラス全体でのまとめが必要と気づいた。自分が授業をする時には、クラスで話し合って検討したい。
- 刃物などの使用について、危険な道具の扱いに対して対応がしっかり出来ていたと思う。カミソリでなくカッターを使用した方が良かったのでは。

(12/21) 模擬授業6時間目前半 (H班)

- 後半の児童を参加させた演示実験のさせ方が上手で、見習いたいと思いました。
- 子どもたちのつぶやきを大切に拾っていく授業にしたいと思った。
- 教具から体感させる場面もあり、体験しながら学んでいけるという工夫がみられた。今後の模擬授業や教育実習に生かしていけたらいいなと思いました。
- 児童が体験する機会が多くあり、より興味を持って授業に取り組むことができたと思う。その楽しい雰囲気も、先生の表情や話し方から作られるものだと、改めて思った。

(12/21) 模擬授業6時間目後半 (I班)

- 導入部分は引き込まれた。展開部分で、それが生かされなかったように感じた。生き物の写真を用意して、児童の発言を引き出す工夫が必要。
- 秋から冬の違いへと話をもっていくのは面白いが、発問の仕方に工夫が必要だった。
- 児童の発言によって、単元の内容から外れてしまった分があり、いけないなと思いました。